

2008年9月27日勉強会『消費社会の神話と構造』第一部～第二部Iまで

## 第一部 モノの形式的儀礼

○いかに豊かでもモノは人間の活動の産物であり、交換価値の法則によって支配される

### 【豊富とパノプリ [セット]】

○モノの累積と豊富…部分で全体を表す

○消費者はモノのセットと関わる モノ…ひとつながりの意味するもの

○モノの順序…消費者はモノの計略に陥る

### 【ドラッグストア】

○文化センター…文化、商品の教養化

○ドラッグストア…消費そのものの繊細なリサイタル・「灰色の物質」を提供する

### 【パルリー2】

○常春の気候・時間感覚の消滅・現金不要…快適さと美と効率に幸福の条件を見出す

○消費の中心では幸福は緊張の解消と定義され、安易に無自覚に消費される

## I 消費の奇跡的現状

○消費の恩恵は労働や生産過程の結果としてではなく奇跡として体験される

○奇跡は技術のおかげであるが、技術は生産の長い過程を消費者の意識から消し去る

### 【カーゴ（貨物船）の神話】

○豊かさを自然の結果として受け取る→豊かさの自然権も相続される

### 【消費対象としての、カタストロフの眩惑】

○消費社会の特徴…マスコミュニケーション全体が三面記事的性格を帯びる

- ・現実的なものが目に付きやすいように劇的にされることで、同時に非現実的なものとして現実から遠ざけられ、記号に還元される。真実より真実らしいことが重要。
- ・われわれは記号に保護されて、現実を否定しつつ暮らしている。

- ・この記号の意味するものはどうでもよく、メディアは記号を記号として、しかしながら現実に保障されたものとして消費することをわれわれに命じる。

○好奇心と否認…記号に飢え記号によって増幅される不安に基づいた現実の否認

○消費の場所…日常生活（隠れ場所としての日常性）

- ・まがいものの世界や世界にかかわっているというアリバイが必要
- ・超越性の増殖するイメージと記号とを絶えず栄養分としなければならない
- ・平穀無事な日常生活は、現実と歴史の眩惑・消費された恒常的な暴力を必要とする  
⇒消費は現実的・社会的・歴史的な世界の排除を安全のための最大の指標とする

○矛盾

- ・快楽主義的な生活スタイルにつきまとう罪の意識  
⇒この罪の意識をとり除くためマスメディアによる見世物的ドラマ化の操作が介入  
安全の選択が正当だと感じられるために外的世界の暴力と非人間性が必要

## II 経済成長の悪循環

### 【集団的支出と再配分】

○国民総生産の再配分はあらゆるレベルでの社会的差別の解消にほとんど効果を上げていない

### 【公害】

○公害…消費の構造そのものの結果。「文化公害」「経済成長の機構に内在する公害」

- ・調子の悪いところを直すための私的および集団的支出（補償）は、すべて帳簿上は生活水準の向上という項目に加算される  
⇒これらすべてが経済成長であり、豊かさである

○E・リール

「富の生産の急速な進展の代償は、労働力の流動化とそれに伴う雇用の不安定化による社会的な普遍的不安感。…この急激な経済成長の渦中で全人口の無視できない部分が成長のリズムについていけなくなっている。…社会は国民総生産からの再配分を増大させ、経済成長の社会的費用を償却せざるをえない。」

○生産性の向上部分がシステムの存続のために使われる…システムの内部崩壊への傾向

### 【経済成長の簿記化、あるいはG・N・Pの神話】

○簿記的幻想…経済的合理性という基準に従って測定し得る

　　目に見える要素だけしか取り入れない

　　肯定面（プラス・黒字）と否定面（マイナス・赤字）がごちゃまぜに加算される

○貧困…最も深刻な公害

- ・すべての公害は経済成長を続けさせるための肯定的要因。生産と消費の賭金として組み込まれている
- ・現存するシステムは悪徳そのものによって繁栄している

### 【浪費】

○ポトラッヂ…無駄遣い的出費によって自己の優越性を示す

○豊かさは消費の中でのみ意味を持つのだろうか

○豊かさがひとつの価値となるためには、十分な豊かさではなくあり余る豊かさが存在しなければならない

○英雄の物語が大浪費家の物語に取ってかわられた

　　⇒この種の見せびらかし的な消耗もやはり「擬人化」されマス・メディアに乗せられて、大量消費を経済的に活気付ける働きを持っている。

○モノは破壊においてのみ真に有り余るほど存在し姿を消すことによって富の証拠となる

## 第二部 消費の理論

### I 消費の社会的論理

#### 【福祉の平等主義的エネルギー】

○現代社会では幸福の神話は平等の神話を集大成し、具体化したもの

　　⇒幸福=モノと記号によって計量可能な福利・物質的安楽

○「福祉の革命」

民主主義の原則が、能力や責任や社会的機会という幸福に対する現実的平等からモノや社会的成功といった幸福の明白な記号を前にした平等にすりかえられる。

　　⇒真の民主主義と平等の不在を全面的に隠蔽する民主主義的イデオロギー

○「成長は豊かさである」「豊かさは民主主義である」…理想主義的解釈

平等に向かっての耐えざる着実な進歩という仮定は、いくつかの事実（貧困等）によって否定される

　　⇒しかし「豊かな社会」の新しい構造は再配分の不平等にもかかわらずこの問題を吸収してしまった

## ○格差や貧困というひずみ

- ・「豊かな社会」も「貧しい社会」も未だかつて存在したことはなかった
- ・あらゆる社会は構造的過剰と構造的窮乏に同時に結びついている  
⇒ある種の社会関係や社会矛盾、不平等は成長を通じて成長の中で再生産されている
- ・平等が存在するのは（貧困がもはや問題でないのは）まさしく平等がもはや現実的重要性を持たなくなつたことをよく示している  
⇒（経済的）不平等がもはや問題にならないという事実自体がひとつの問題となっている

## 【産業システムと貧困】

### ○システムの戦略…人類の社会を不安定な状態、絶えざる欠損の状態に保つ

### ○貧困や公害は社会一経済構造の中に存在している

## 【新しい差別】

### ○現代ではモノよりも空間やその社会的性格の方が重要

- ⇒追求される財の質に結びついた社会的差別がある
- ・資本主義システムの進歩を客観的な社会の進歩と取り違えてはいけない

## 【階級的制度】

### ○消費…社会の差異を強化する

“消費はひとつの階級的制度である”

…特定の人々だけが環境に内在する諸要素（機能的生活、美的素質、高い教養）の自立的で合理的な論理に接近できる

## 【救急の次元】

### ○モノはひたすら社会的価値（地位）を装う

- ・世襲される正当性（血統的・文化的）
- ・恩寵による地位…上流階級のもの  
⇒上流階級は文化と権力の行使により自己の優越性を確認する

## 【差異と成長社会】

### ○消費社会の二つの側面

- （一）コードに基づいた意味づけとコミュニケーションの過程としての側面
- （二）分類と社会的差異化の過程としての側面（消費が地位を示す価値となる）

- “人びとは決してモノ自体を（その使用価値において）消費することはない”
  - ⇒人々は自己と他者を区別する記号としてモノを常に操作している
  - ⇒この過程で消費者は差異の秩序を打ち立て、相対的に捉える
- 相対性の強制
  - コードへの差異的登録が無限に続く =消費の基本的性格（限度がない）
- 消費の加速度的増加（巨大な生産力）以上に狂乱的な消費力の間にさえも距離を増大させる需要の攻勢
- 「収入が多くなればなるほど、より多くより良いものを求める」
- 欲求とその充足は下の方へ浸透していく
  - ⇒大衆化現象は頂上での選別的な革新の結果としてのみ実現される
  - ⇒中間層や下層級の欲求は、上層階級の欲求に対して常に時間的・文化的に一步遅れたりずれたりする
  - =民主主義社会における差別の重要な問題
- 渴望の生産過程さえもが不平等
  - 消費衝動は垂直的な社会階梯における満たされない欲求を埋め合わせることができる
- 「心理的窮乏」…宣伝の狡猾さと戦略上の価値は、他人と比較させること
  - ⇒競争心をかきたてる欲求と生産との間の恒常的緊張
- 豊かさは差別そのものの関数
  - 【旧石器時代、あるいは最初の豊かな社会】
  - 生産すればするほど豊かさから遠ざかっていく
    - システム全体が人間的欲求を無視する
  - 未開人の真の豊かさ=われわれには豊かさの記号しかない
- 貧困とは、人間と人間との関係…社会関係の透明さと相互扶助
  - 富は財ではなく、人々の間の具体的交換の中に生じる
  - ⇒現代の「差別」社会は逆にそれぞれの社会関係が個人の欠乏間を増大させている